

●モノグラフ  
小学生ナウ  
Vol. 15-6

学習塾

目次

学習塾通いの背景 .....	深谷昌志 .....	2
〔調査レポート〕学習塾		
要約 .....		6
はじめに .....		8
1. 調査対象のプロフィール .....		9
● サンプルの構成 .....		10
2. 学習塾通いをしている子どもたち .....		15
● 塾通いの実態 .....		15
● 塾の効果と失ったもの .....		21
3. 学習塾に行かない子どもたち .....		24
● 塾に行かない理由 .....		24
● 塾に行く子と行かない子 .....		29
4. 進学塾と補習塾 .....		32
● 塾での生活 .....		34
● 塾の評価 .....		36
5. 学校と学習塾 .....		40
● 学習場面の比較 .....		42
● 先生に対する評価 .....		45
● 学校と塾の違い .....		48
● まとめに代えて .....		50
〔対談〕私塾の歴史を振り返る .....		
石川松太郎 vs 深谷昌志 .....		51
・文献紹介『日本子どもの歴史4 武士の子・庶民の子（下）』 .....		60
資料1 調査票見本 .....		63
資料2 学年・性別集計表 .....		70

\*おことわり：本文中に使用した写真は、本文・テーマとはいっさい関係ありません。

# 学習塾通いの 背景

静岡大学教授  
深谷昌志

## 過半数の中学生が塾通い

全国でどの程度の子どもたちが塾通いしているのか。平成5年度の調査を含めて文部省は学習塾について3回の全国調査を実施している。学習塾に対する是非を論ずるにあたって、なにはともあれ、文部省調査のデータをふまえる必要がある。

	昭和51年	昭和60年	平成5年
小学4年	11.9%	15.4%	23.6%
5年	19.4	21.1	31.1
6年	26.6	29.6	41.7
中学1年	37.9	41.8	52.5
2年	38.7	44.5	59.1
3年	37.4	47.3	67.1

(数値は通塾率)

あらためてふれるまでもなく、塾通いする

子どもたちは増加の一途をたどっている。そして、平成5年の結果によれば、小学5年生の3割、6年生の4割が塾通いをしているだけでなく、中学生の通塾率は5割を上回っている。

どうしてこれほどまでに多くの子どもたちが塾通いをしているのか。中学生に塾通いについての気持ちを聞いてみたいと思った。調査票を作成し、調査の依頼を始めた。

ところが、調査を拒否する中学校が多いのである。「塾通いをしないように指導しているところなので問題をあらわにしたいくない」。あるいは、「調査票のこの部分が答えにくい」。そして、「学校として塾を公認する感じになるので調査を控えたい」などが、非協力の理由だった。

たしかに、調査を実施しようとするときさまざまな手間がかかるから、協力したくないという気持ちは理解できる。しかし、塾通いの実態は学校として知っていてよいのではない

か。というより、通塾率の高さを考えれば、塾通いをめぐる状況を知っておくことが学校としての責務のように思われる。それだけに学校の閉鎖的な態度に失望感を持った。それでも、何校かの学校の協力を得ることができて、中学生たちの学習塾観を分析することができた。

### 塾の先生の方がよい

こうして中学生を対象とした学習塾通いの調査を実施できたが、結果の概要は本モノグラフ・シリーズの中で「学習塾通いする中学生」(『モノグラフ・中学生の世界』Vol.49)の形で発表した。

調査結果の中で目についたのは、生徒たちの教師観だった。学校の教師と対比させて学習塾の教師をとらえたとき、生徒たちは学習塾の教師に対し、学校の教師より教え方がうまいだけでなく、知識も豊富な上に、人間的にも尊敬できると評価していた。調査を始める前から、塾の方が教え方が上手だろうとは予想していた。しかし、知識の量はむろんのこと、尊敬などは学校の教師に軍配が上がるものと信じていた。詳しい結果は報告書を参照して欲しいが、生徒は大差をつけて塾の教師の方が信頼できると答えている。

結果におどろいて、回りにいる学生たちの感想を尋ねてみた。「中3の夏に成績が落ちたとき、塾の先生が真剣に心配して勉強の仕方を教えてくれた」「友だちが服装の問題で学校ともめていたとき、塾の先生が学校に着ていけない分だけ、塾には好きな格好で来なさいと励ましてくれた」など、学生の反応は塾の先生にきわめて好意的だった。そして、今回の調査結果を話すと十分に納得できるといふ。

これまで学習塾というと、多くの場合、進学のための学力をつけるところという感じで、大きく評価しても「第2の学校」どまりだった。ところが、生徒たちの評価は「第2」を支持して「(第1の)学校」を圧倒している。

そういえば、子どもが塾に通っていた頃を思い起こす。中3の冬、子どもが体調を崩して、高校受験が危うくなった。塾を欠席すると、塾から容態を尋ねる電話があり、その後でいねいなコメントをつけて教材が送られてきた。欠席が長引くと、塾の教師が訪ねてきて、家庭で個人授業をしてくれた。

高校進学に不安を感じていたので、塾の対応の親切さに地獄で仏に会う思いがした。その間、こちらが担任に欠席の連絡をしたのと友だちが見舞いに来たのを除くと、学校からのコンタクトはほとんどなかった。

学校は何百人の生徒を抱えているから、一人一人の生徒にきめ細かく対応できないという。しかし、何百人の生徒がいるという意味では学習塾も変わりはない。それにもかかわらず、学習塾はどうして個別の対応が可能だったのだろうか。

また、学習塾は生徒の月謝で経営しているので、生徒や親に敏感に反応するのが当然だが、学校はそうはいかないという言い方もある。

そうした学校サイドの理由づけはともあれ、親としては学習塾に対する信頼感を増すと同時に、それと対照的に、学校に不信感を抱くことになる。

### 学校は先進地区だった

官尊民卑という言葉がある。学校と学習塾との関係は、学校の官に対して、学習塾は民の感じになる。

歴史的に考えると、日本の近代学校は西欧化を推進するセンターであった。寺子屋や藩学で土着の文化を伝達したのに対し、近代の学校では土着を切り捨てる形で西欧の文化を紹介した。特に、各県に設置された(旧制)中学は県レベルの西欧化の中心であったし、小学校はそれぞれの地域へ西欧をもたらす窓口であった。いわば、学校は当時の社会の先進地域だった。そして、そうした学校に通って、西欧をいち早く身につけた人が明治以降

の社会で活躍していった。残念ながら、土着の文化は古く利用する価値のないものになってしまった。

本来の私塾は、藩学に象徴される公教育に対抗して、在野の思想を広める反体制的な機関だった。しかし、近代化の過程の中で、各地に点在していた多くの私塾は公教育に準拠する形で変身していったといわれる。そして公教育への脱皮に失敗した私塾は、教育の世界から姿を消すことになる。

その結果、明治の教育を調べると、在野的な私塾が衰退する反面で、旧制中学受験のための私塾がかなり早くから登場している。また、東京を中心に旧制高校受験の予備校も発達している。したがって、歴史的に明治以降、日本の私塾は公立学校に入学する生徒の準備機関としての性格を増していった。

長い間、学習塾が学校を補完する機関とし

ての評価にとどまり、(すでにふれたように)学校として「第2」扱いされていたのは上述した歴史的な背景をふまえてのものなのであろう。

しかし、中学生を対象とした調査結果によると、学習塾は学校より生徒たちの心をとらえている。これは、学習塾が奮起して信頼を勝ち得ていったためなのか、それとも、学校が地盤沈下した結果なのか。おそらく、両側面が重なり合っている現象であろうが、学習塾の評価が高まったのはよい。しかし、学習塾の調査をしているはずなのに、学校に対する信頼感の低下がなんとも気になってきた。それと同時に、学習塾に対する信頼が中学生から芽生えたのか、それとも、小学生もそう思っているのか、小学生を対象として学習塾観を調べたいと思い始めた。こうした問題意識から取り組み始めたのが本調査である。

〔調査レポート〕

# 学習塾

静岡大学教授

深谷昌志

杉並区立杉並第六小学校教諭

土橋 稔

埼玉県立小川高等学校教諭

三枝恵子





調査レポート

学習塾

要約

●調査概要

1. 調査主題 学習塾
2. 調査視点 塾通いが過熱化する中で、子どもたちはどんな思いで塾に通い、塾をどう評価しているのか。さらに、塾に通っている子と通っていない子の差はどこにあるのかなどを明らかにしようとした。
3. 調査項目 通塾率、通塾の日数、塾に行くようになった理由、塾に行かない理由、塾の効果とマイナス面、学校と塾との比較、担任と塾の先生との比較、など。
4. 調査時期 1995年7月
5. 調査対象 東京・千葉・岐阜の小学校5・6年生
6. 調査方法 学校通しによる質問紙調査
7. サンプル数 1,813名

1. この調査での塾通いする子どもは全体で50%、5年生で45%、6年生で54%。通塾の子どもの33%が進学塾に通っている。(図3・4、表7)

2. 1週間に塾に通う日数は平均2.8日、通う時間の平均は4時55分、帰宅は7時13分である。塾から帰る時間は、進学塾の子どもが8時以降になる割合が6割を超し、10時をすぎて帰る子も1割いる。(表8・9・22)



3. 塾に行くようになった理由は「今よりもっと勉強ができるようになりたいから」が「とても・わりとそう」の割合は約7割、「将来役に立つと思ったから」が約6割、「家の人が行くように言ったから」が約4割、「私立（国立）中学を受験するため」が約3割である。

塾のタイプ別では、進学塾は「受験するため」、補習塾・補習塾と進学塾の混合塾では「今よりもっと勉強ができるように」が7～8割を占める。（図5、表23）

4. 塾の効果は「勉強の仕方がわかった」「友だちが増えた」「勉強のやる気がでた」「学校の成績が上がった」と高く評価している。

逆に、失ったものは「ゆっくり友だちと遊べない」が5割を超え、「寝る時間が少なくなった」と思う子は約3割。（図6・7）

5. 塾に行かない理由は「ただ何となく」「自由に使える時間がなくなるから」などが上位を占め、成績との関係が顕著である。（図9、表14）

6. 塾に行っていない子で今後も塾に行かない子は52%、塾に行く予定のある子は48%、中学生になってから行く予定の子が3割。（表15）

7. 学校と塾の算数の授業を比較すると、塾の方が「授業がわかりやすい」「宿題がたくさん出る」「授業を聞くのが楽しい」の項目で10%を超える差がある。（表30、図13）



8. 先生に対する評価では、「幅広い知識を持つ」「教え方がうまい」「先生として尊敬できる」で塾の先生が高い評価を得ている。特に進学塾に高い傾向が目立つ。（表31、図15・16）

9. 小学生の塾の評価も中学生同様に高く、子どもたちの小学校離れが確実に進行している。進学塾に行っている子は学校に魅力を感じていない姿が目立ち、補習塾に行っている子の中には塾に通うことでかろうじて基礎学力を身につけている子もいる。さらに、学習塾に行っていない子どもの学校の授業や担任評価が、塾に行っている子より低い数値を示していることも気になる。

---

---

## はじめに

子どもたちの塾通いは日常化しているといわれる。文部省の1993年の調査によれば、小学6年生の約42%、中学3年生では約67%が塾に通っている報告がなされた。昭和40年代は「乱塾時代」といわれたが、さらに大幅に通塾率が伸び、少子化で子どもたちは減少しているにもかかわらず、塾の数は増加している。また、学習塾は海外にも進出し、帰国後の受験競争に備え、現地の日本人の子どもたちに学習指導を行っているという。

こうした塾通いが過熱化する現状の中で、子どもたちはどんな思いで塾に通い、塾通いの効果をどう評価しているのだろうか。一方塾に通っていない子どもたちの塾への評価は、

そして、塾に行かない理由は何なのだろう。

さらに、『モノグラフ・中学生の世界』Vol. 49「学習塾通いする中学生」では、塾の授業を学校と比べ、「わかりやすく力がつきそう」、塾の先生は「教え方がうまいだけでなく、知識も豊富で人間的で尊敬できる」とし、中学生の学習塾への評価の高さが注目された。

そこで、小学生は学校の授業や教師と比較し、塾をどう評価しているのだろうか。また、塾に通っている子と行かない子の差はどこにあるのだろうか。こうしたことを明らかにするために調査分析を試みようとしたのが、本レポートの目的である。



## 1

## 調査対象のプロフィール



夜の10時頃、疲れた様子で電車に座っている小学生や、塾の前で迎いの車を待つ子どもたちの姿は日常生活の中ですっかりなじみになってしまった。中学受験のためか、学校の勉強の補習のためか、または学校とは異質な子どもを引きつける魅力が塾にあるのか。

文部省の1993年調査によれば、小学生の通塾率は、

小学校1年生	12.1%
2年生	14.1%
3年生	17.5%
4年生	23.6%
5年生	31.1%
6年生	41.7%

と報告され、6年生になると、4割強の子どもが塾通いをしている。これにおけいこごとに加わると、帰宅後の子どもたちの生活はかなり忙しく、自分が塾に行っている日は友だちが暇で、友だちが塾の時は自分が暇でと、なかなかスケジュールが合わず、友だちと遊ぶことも難しい状況であろう。小学生がポケベルを持ち、塾の時間になると、親からメッセージが入るとい話も本当らしい数値である。

## ● サンプルの構成)))

さて、今回調査対象となった子どもたちは東京、千葉、岐阜の小学校5年生882名、6年生931名の1,813名である(表1)。

ここでは、学習塾と最も関係が深い学校・

勉強を中心に、子どもたちのプロフィールをみることにする。

学業成績は表2の通りである。成績が「上・中の上」の上位層、「中」の中位層がそれ

表1 サンプルの構成

(人)

	男子	女子	全体
5年	448	434	882
6年	450	481	931
計	898	915	1,813

表2 学業成績 × 属性

(%)

		上	中の上	中	中の下	下
全体		12.3	25.1	42.5	14.6	5.5
性別	男子	14.4	26.2	37.8	15.2	6.4
	女子	10.3	24.1	47.1	14.0	4.5
学年	5年	13.2	25.5	41.7	13.3	6.3
	6年	11.6	24.8	43.1	15.9	4.6
通塾	通塾	16.3	26.9	41.2	11.7	3.9
	なし	9.0	23.5	44.1	16.6	6.6

ぞれ約4割、「中の下・下」の下位層が約2割、通塾している子は成績が「中の上」以上が43%、通塾していない子は33%と、通塾している子に成績上位者が顕著である。

学校の楽しさは、表3によれば、「とても楽しい」と答えた子は35%、「かなり」を合わせると約8割の子が、学校は楽しいと答えている。通塾している子の方は84%と、より学校への評価が高い数値を示している。

表4は子どもたちの進路を「高校進学希望」の項目で尋ねたものである。「入るのがとても難しい高校」12%、「入るのが難しい高校」25%と難しい高校を目指す子が約4割、「高校ならどこでもよい」11%、これに「入るのがとても・わりとやさしい高校」を合わせると約4割。難しい高校とやさしい高校へと子どもたちの進路がほぼ二分されている。学習塾に関しては、通塾している子のほぼ半

表3 学校の楽しさ

		(%)			
		とても楽しい	かなり楽しい	あまり楽しくない	ぜんぜん楽しくない
全体		34.8	45.8	16.5	2.9
通塾	通塾	39.2	44.4	13.8	2.6
	なし	31.0	47.4	18.6	3.0

表4 進路 × 属性

(%)

		とても 難しい高校	難しい 高校	わりと やさしい高校	とても やさしい高校	高校ならど こでもよい	その他
全 体		12.4	25.3	26.1	7.8	10.6	17.8
性 別	男 子	13.9	25.0	21.3	7.5	14.4	17.9
	女 子	10.8	25.7	31.0	8.0	6.9	17.6
学 年	5 年	15.2	22.8	23.9	9.2	11.4	17.5
	6 年	9.7	27.6	28.4	6.4	9.9	18.0
成 績	上	34.9	30.5	7.5	0.9	7.0	19.2
	中の上	14.8	40.5	18.1	3.8	6.8	16.0
	中	6.8	22.0	35.6	6.8	11.7	17.1
	中の下	7.1	12.7	31.7	17.1	13.1	18.3
	下	7.7	6.6	20.9	24.1	18.7	22.0
通 塾	通 塾	15.7	29.4	22.5	6.0	9.5	16.9
	な し	9.3	21.5	30.1	8.9	11.1	19.1

数が難しい高校を目指し、通塾していない子との差が著しい。

では、学校の勉強はどのくらい理解しているのだろうか。図1は「学校の勉強がわからないことがあるか」を国語、算数、社会、理科について尋ねたものである。「いつもわからないと感じる」子は4教科とも1～2%で、「わからないことが多い」を含めると算数が最も高く17%に達し、国語や社会、理科は1

割前後である。「全部わかる・だいたいわかる」と答えた子は国語と理科で約6割、算数と社会で約5割と、小学校5、6年生のこの時期から学校の勉強に不安な子の多さが気になる結果である。

学習塾の関連では、表5より「算数」に顕著な差がみられ、通塾している子で「いつもわからないと感じる・わからないことが多い」とするのは11%に対し、通塾していない

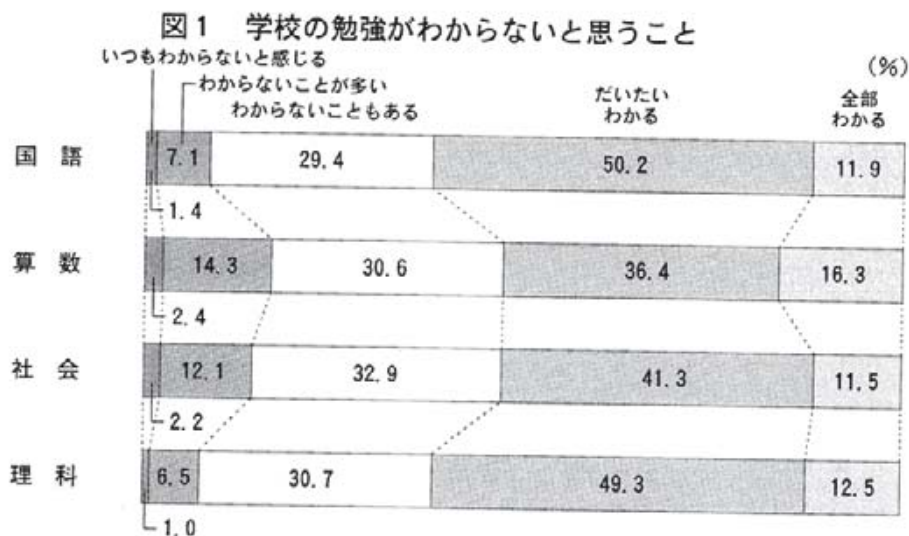


表5 学校の勉強がわからないと思うこと × 属性

		(%)			
		国語	算数	社会	理科
性別	男子	10.8	14.6	14.0	7.7
	女子	6.2	18.9	14.5	7.3
学年	5年	9.2	18.1	15.0	8.2
	6年	7.8	15.5	13.6	7.0
通塾	通塾	6.2	10.9	12.3	5.7
	なし	10.2	21.7	15.3	8.9

「いつもわからないと感じる」+「わからないことが多い」割合



子は22%とほぼ2倍の数値の開きがあり、学校の勉強を学習塾に依存しているとも考えられよう。

学習塾以外の家庭学習は図2、表6に示した通りである。

図2 家庭学習

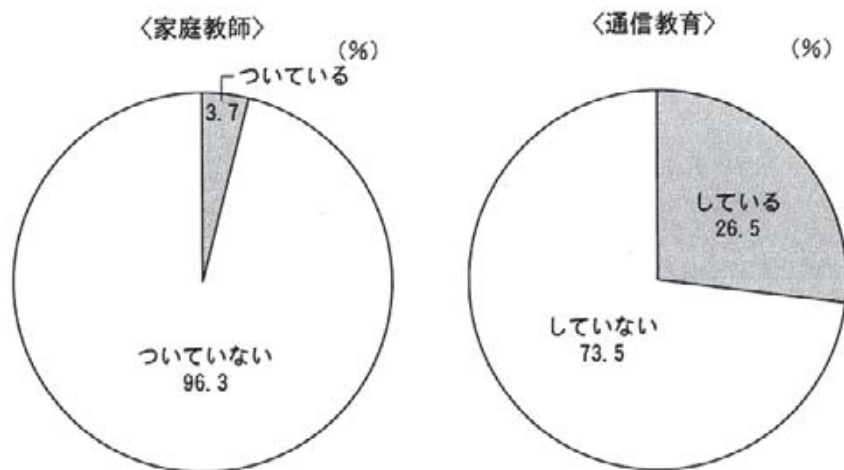


表6 家庭学習 × 属性

	全 体	性 別		学 年		成 績				
		男子	女子	5年	6年	上	中の上	中	中の下	下
家庭教師	3.7	3.4	3.9	3.9	3.4	3.9	4.0	3.3	3.5	4.9
通信教育	26.5	23.3	29.8	29.1	24.1	23.2	31.8	26.7	23.8	16.3

家庭教師 = 「ついている」割合  
通信教育 = 「している」割合

2

## 学習塾通いをしている子どもたち



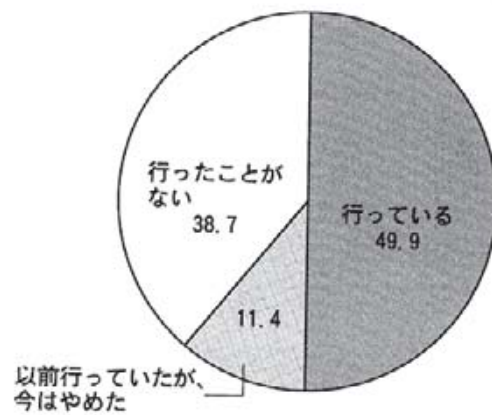
### ●塾通いの実態)))

今回調査対象の通塾の様子は図3に示した通りである。「現在塾に通っている」子は50

％、「以前行っていたが、今はやめた」子を含めると、塾通いの体験を約6割の子どもた

図3 塾に通っているか

(%)



ちが持っている。

表7は、通塾の実態を属性との関連で示した。本調査のサンプルの通塾率は5年生で45%、6年生で54%と、文部省の全国調査の数値より上回る傾向にある。成績の上位者や難関高校を目指している子は通塾率が6割以上に達し、まさに塾過熱時代の様相を呈している。

通っている塾のタイプは、図4の通りである。近年、学習塾も子どもの進路やニーズに

対応し教える内容も形態も多様化しているが、「進学塾」が最も多く33%、「進学塾と補習塾の混合塾」が27%、「補習塾」は20%である。

1週間に塾に通う日数は表8に示したように、週2日が3割強、3日が約3割、平均では2.8日。学年と通塾日数の関係では平均の2.8日を上回る、3日以上の数値で比較すると、5年生49%、6年生59%と、6年生の塾通いの日数の多さが目をひく。

表7 塾に通っているか × 属性

		(%)		
		行っている	以前行っていたが、今はやめた	行ったことがない
全体		49.9	11.4	38.7
性別	男子	50.5	11.2	38.3
	女子	49.3	11.6	39.1
学年	5年	45.1	10.7	44.2
	6年	54.2	12.0	33.8
成績	上	64.6	6.7	28.7
	中の上	53.5	11.3	35.2
	中	48.3	11.4	40.3
	中の下	41.3	15.7	43.0
	下	37.2	10.5	52.3
進路	とても難しい高校	63.2	5.0	31.8
	難しい高校	58.1	11.2	30.7
	わりとやさしい高校	43.1	12.3	44.6
	とてもやさしい高校	40.8	19.2	40.0
	高校ならどこでもよい	46.4	9.6	44.0

図4 通っている塾のタイプ

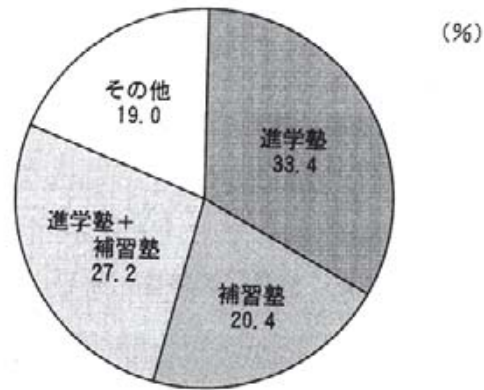


表8 1週間の通塾の日数 × 属性

(%)

		1日	2日	3日	4日	5日	6日	7日	平均
全体		11.5	34.1	29.4	15.5	7.4	1.6	0.5	2.8日
性別	男子	13.5	35.5	28.4	14.0	6.0	1.9	0.7	2.7日
	女子	9.5	32.9	30.3	17.1	8.8	1.2	0.2	2.9日
学年	5年	14.2	37.3	27.5	13.9	5.4	0.6	1.1	2.7日
	6年	9.6	31.6	30.8	16.8	8.9	2.3	0.0	2.9日
成績	上	11.3	18.8	33.9	18.0	16.5	1.5	0.0	3.1日
	中の上	7.3	33.6	27.3	19.5	9.1	3.2	0.0	3.0日
	中	12.9	39.1	30.3	12.0	4.2	0.9	0.6	2.1日
	中の下	16.1	36.6	30.1	12.9	4.3	0.0	0.0	2.5日
	下	16.7	33.4	20.0	23.3	0.0	3.3	3.3	2.8日
進路	とても難しい高校	9.5	24.6	32.5	18.3	9.5	4.0	1.6	3.1日
	難しい高校	7.2	34.1	27.7	20.4	10.2	0.4	0.0	2.9日
	わりとやさしい高校	13.5	33.7	32.6	12.9	5.6	1.7	0.0	2.7日
	とてもやさしい高校	17.4	37.0	23.9	15.2	6.5	0.0	0.0	2.6日
	高校ならどこでもよい	14.9	44.5	21.6	12.2	5.4	1.4	0.0	2.5日

また、表9の塾に通う時間をみると、子どもたちは平均して4時55分に塾に行き、7時13分に帰宅する生活を送っている。8時以降に帰宅する子どもも26%いる。表は省略したが、成績の上位者や難しい高校を目指している子どもが帰宅時間が遅い傾向にある。週3日、7時すぎまで塾で勉強する生活は小学生

の生活のリズムを崩し、膨大なエネルギーを学習に費やしていることの負担の大きさが危惧される。中学生の通塾率から考えて、子どもたちの塾通いの生活は中学生でも続くことが予想され、人間形成の大切な時期にこれによいのかという疑問が残る結果といえよう。

次に、このような高い通塾率の背景の要因

表9 塾通いの時間（平日）

(%)

塾に行く時間		塾から帰る時間	
1. 4時前	5.9	1. 5時前	3.4
2. 4時～4時59分	39.4	2. 5時～5時59分	7.2
3. 5時～5時59分	45.2	3. 6時～6時59分	31.8
4. 6時以降	9.5	4. 7時～7時59分	31.8
		5. 8時以降	25.8
平均	4時55分	平均	7時13分



を探っていききたい。図5は、塾に行っている子に「塾に行くようになった理由」を尋ねた結果である。「今よりもっと勉強ができるようになりたいから」について「とてもそう」と答えた子は84%、「わりとそう」を含めると約7割、「将来役に立つと思ったから」は同様に約6割、「家の人が行くように言った

から」は約4割、「私立（国立）中学を受験するため」が約3割、「友だちが行っているから」「学校の勉強がわからなかったから」は約2割。子どもの塾通いは、学業成績への意欲の表れともとれる結果であり、背景に塾通いする子を支える親の姿勢がうかがえる。

図5 塾に行くようになった理由

	(%)			
	とても そう	わりと そう	あまり そうでない	ぜんぜん そうでない
1. 今よりもっと勉強ができるようになりたいから	34.1	32.6	18.9	14.4
2. 将来役に立つと思ったから	25.5	33.4	22.6	18.5
3. 家の人が行くように言ったから	23.6	18.1	25.1	33.2
4. 私立（国立）中学を受験するため	22.5	10.8	14.1	52.6
5. 友だちが行っているから	6.0	17.7	22.0	54.3
6. 学校の勉強がわからなかったから	6.8	16.3	28.9	48.0

表10の属性との関連では、成績の上位者に「今よりもっと勉強ができるようになりたいから」「将来役に立つと思ったから」「私立(国立)中学を受験するため」の理由が高い数値を示し、成績下位者では「今よりもっと勉強ができるようになりたいから」「家の人が行くように言ったから」「学校の勉強がわ

からなかったから」の項目が上位を占める。成績上位者の子どもは進学を考え、より一層成績のアップを目指し自分で通塾を希望し、逆に、成績のよくない子どもは家の人が心配して成績を少しでも上げようと、学校の勉強の補習的な意味の塾に通わせるといった傾向であろうか。

表10 塾に行くようになった理由 × 属性

(%)

	性 別		学 年		成 績				
	男子	女子	5年	6年	上	中の上	中	中の下	下
1. 今よりもっと勉強ができるようになりたいから	68.2	65.3	65.3	67.7	67.2	70.1	66.0	60.8	63.3
2. 将来役に立つと思ったから	59.2	58.7	61.9	56.7	71.0	63.3	54.2	55.4	43.3
3. 家の人が行くように言ったから	48.4	35.1	43.6	40.3	38.1	33.2	45.6	41.0	66.7
4. 私立(国立)中学を受験するため	29.2	37.3	32.8	33.7	55.3	40.1	26.0	19.1	13.3
5. 友だちが行っているから	24.3	23.2	24.5	23.2	14.5	25.7	27.6	17.3	26.7
6. 学校の勉強がわからなかったから	21.1	25.1	19.4	25.7	5.3	15.5	28.0	44.7	36.7

「とても」+「わりと」その割合

## ●塾の効果と失ったもの)))

では、学習塾に通っていることを子どもたちはどのように評価しているのだろうか。

図6によれば、「勉強の仕方がわかった」が「とても・かなり」あった割合は79%、「友だちが増えた」(68%)、「勉強のやる気がでた」(64%)、「学校の成績が上がった」(63%)と6割を超え、学業成績での塾の効果を

高く評価している。

表11は属性別の分析である。男女別、学年による差はほとんどみられないが、成績上位者では勉強の仕方がわかって、やる気がでて成績も上がったと学習面での効果が高く、さらに、塾で友だちも増えたと塾への期待が大きいことがわかる。一方、下位者では成績が

図6 塾の効果

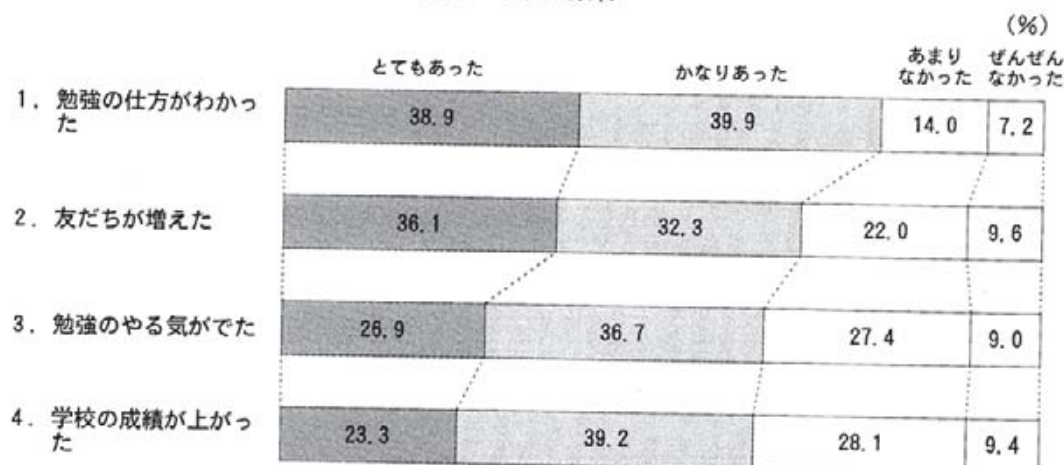


表11 塾の効果 × 属性

	(%)								
	性別		学年		成績				
	男子	女子	5年	6年	上	中の上	中	中の下	下
1. 勉強の仕方がわかった	40.1	> 37.7	36.2	< 40.9	69.9	44.7	28.8	23.4	13.8
2. 友だちが増えた	32.4	< 39.8	36.2	35.9	51.9	43.3	29.3	25.0	24.1
3. 勉強のやる気がでた	26.7	27.1	27.1	26.8	43.6	33.0	20.8	16.8	6.9
4. 学校の成績が上がった	23.5	23.1	21.3	< 24.8	47.0	33.3	12.3	10.8	6.9

「とてもあった」割合  
○は最大値

上がった、やる気がでたりすることはほとんど期待できないが、友だちがいるから塾に行くといった様子うかがえる。

それでは、塾通いして子どもたちは何を失っているのだろうか。

図7によれば、「ゆっくり友だちと遊べない」と「とても・かなりそう思う」子は半数を超え、「寝る時間が少なくなった」は約3割、塾に通うことで時間的制約を受け、生活

にゆとりがなく、特に友人関係に影響を与えているようだ。小学生も高学年になると学校から帰る時間も遅く、さらに夕方5時頃から塾に行き、7時すぎに帰ることを週の3日続けるという生活のリズムでは「ゆとりのなさ」を感じても当然である。

表12は属性による分析である。成績上位者に「ゆっくり友だちと遊べない」「寝る時間が少なくなった」の数値が高く、中学受験や

図7 塾に通って失ったもの

	(%)			
	とても そう思う	かなり そう思う	あまり そう思わない	ぜんぜん そう思わない
1. ゆっくり友だちと遊べない	27.1	27.5	28.2	17.2
2. 寝る時間が少なくなった	17.2	13.3	19.4	50.1
3. ゆっくり夕食を食べられない	10.2	12.9	31.2	45.7
4. ゆっくり家族と話せない	8.3	9.1	32.5	50.1

表12 塾に通って失ったもの × 属性

	(%)								
	性 別		学 年		成 績				
	男子	女子	5年	6年	上	中の上	中	中の下	下
1. ゆっくり友だちと遊べない	57.3	51.8	53.8	55.2	62.1	51.2	52.7	57.9	62.1
2. 寝る時間が少なくなった	27.2	33.6	28.0	32.3	42.4	35.2	24.8	27.3	14.2
3. ゆっくり夕食を食べられない	23.5	22.7	24.1	22.3	22.7	23.1	23.3	16.8	34.5
4. ゆっくり家族と話せない	18.0	16.7	18.2	16.8	15.9	16.8	18.8	14.9	17.2

「とても」+「かなり」そう思う割合

難しい高校受験を目指して遅くまで勉強する姿が想像できる。成績下位者では「ゆっくり友だちと遊べない」「ゆっくり夕食を食べられない」項目で数値が高くなっている。

こうしたゆとりのなさをもたらす塾通いであるが、「塾の楽しさ」についてはどう思っているのだろうか。表13によれば、塾を「とても楽しい」37%、「かなり」を合わせると77%の子が塾を「楽しい」と評価している。

成績の上位者でよりその傾向は強い。

通塾している子の学校の楽しさをみると、「とても・かなり楽しい」割合は84%（p. 11表3）であるから、小学生の塾評価は学力面では評価が高いものの、「楽しさ」では学校に優るものではないということだろうか。

表13 塾の楽しさ × 属性

		(%)			
		とても楽しい	かなり楽しい	あまり楽しくない	ぜんぜん楽しくない
全体		36.6	39.9	17.9	5.6
性別	男子	32.9	41.4	19.5	6.2
	女子	40.2	38.5	16.4	4.9
学年	5年	36.5	38.0	19.4	6.1
	6年	36.6	41.4	16.8	5.2
成績	上	41.5	39.3	13.8	5.4
	中の上	39.8	41.7	14.8	3.7
	中	35.3	40.8	18.1	5.8
	中の下	26.7	38.9	30.0	4.4
	下	26.7	36.7	23.3	13.3





今回調査対象のほぼ半数は塾に行っているが、半数は以前行っていたがやめてしまったり、行ったことのない子どもたちである。そ

こで、この章では現在塾に行っていない子どもの塾評価、塾に行っている子のイメージから塾に行かない理由を探ってみよう。

### ●塾に行かない理由)))

図8は現在塾に行っていない子どもの塾体験を示した。75%の子どもは「塾に1度も行ったことはない」、25%は「以前行っていたが、今は通っていない」子どもたちである。塾に行っていない子どもたちは成績の下位者

に多い (p.16表7)。

では、塾に行かない理由は何であろうか。図9によれば、「ただ何となく」「自由に使える時間がなくなるから」が上位を占め、50%を超える。

図8 塾をやめたことがあるか

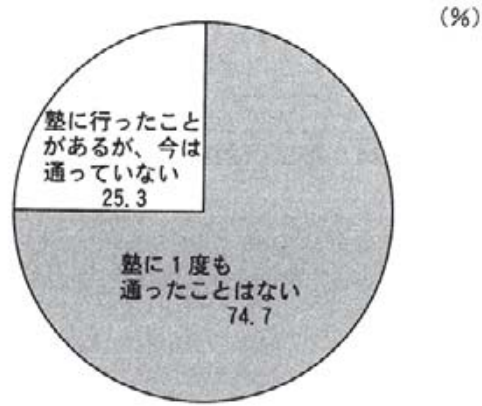


図9 塾に行かない理由

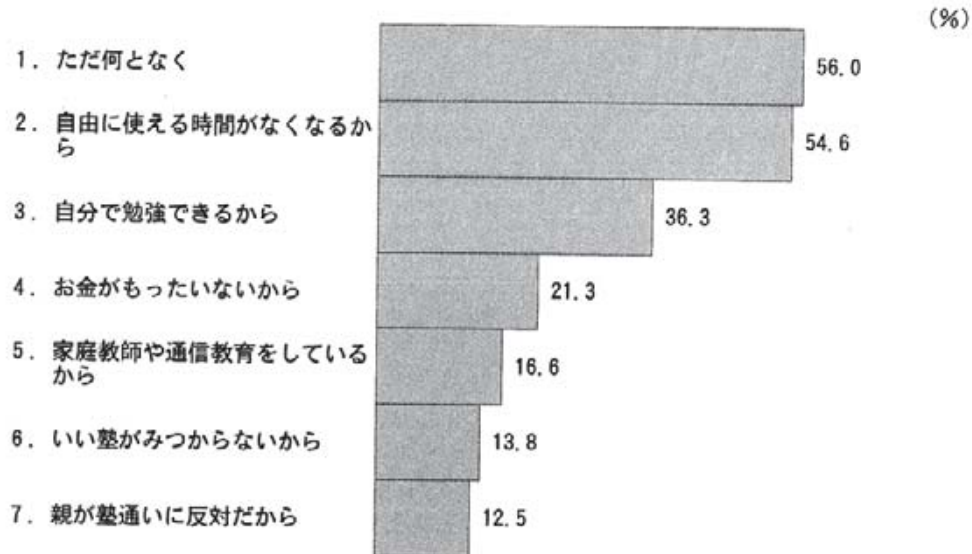


表14は塾に行かない理由を属性で分析したものである。男子は「ただ何となく」「自由に使える時間がなくなるから」「お金がもったいないから」が女子より高い数値を示し、女子では「家庭教師や通信教育をしているから」「親が塾通いに反対だから」でわずかに

差がみられる。成績別では上位者に「自分で勉強できるから」「親が塾通いに反対だから」「家庭教師や通信教育をしているから」、下位者では「ただ何となく」「お金がもったいないから」の理由で顕著な差がみられる。

これらの結果から、成績上位者の中には、

表14 塾に行かない理由 × 属性

(%)

	性 別		学 年		成 績				
	男子	女子	5年	6年	上	中の上	中	中の下	下
1. ただ何となく	59.9	52.3	55.3	56.8	35.3	45.3	60.1	66.4	74.0
2. 自由に使える時間がなくなるから	58.9	50.5	52.5	56.8	57.4	54.1	51.9	56.0	60.0
3. 自分で勉強できるから	35.4	37.1	35.6	37.0	69.1	51.4	33.0	11.2	18.0
4. お金ももったいないから	24.5	18.3	23.1	19.5	26.5	21.0	17.9	20.7	36.0
5. 家庭教師や通信教育をしているから	13.9	19.1	16.9	16.2	19.1	26.0	14.8	8.6	6.0
6. いい塾が見つからないから	12.3	15.2	12.2	15.4	11.8	13.3	14.5	13.8	14.0
7. 親が塾通いに反対だから	10.1	14.7	13.0	11.9	25.0	11.0	12.3	7.8	14.0

○は最大値

時間的に拘束されない通信教育などを活用しマイペースで勉強し塾に行かない層と、中学や難関高校受験のためや成績をもっと上げる目的で塾に行く層が、成績下位者では、友だちと遊びたいために塾に行く層と、何となく塾に行かない層の存在がうかがえる。

さらに、表15は今後の通塾予定を尋ねたものである。「今後も塾通いするつもりはない」52%、「そのうちに（小学生のうちに）、塾に通うつもり」16%、「中学生になったら、塾に通うつもり」32%と、現在塾に通っていない子どもたちのほぼ半数は今後も塾に行く

表15 今後塾に通う予定があるか × 属性

		(%)		
		塾通いするつもりはない	そのうちに（小学生のうちに）、塾に通うつもり	中学生になったら、塾に通うつもり
全体		51.6	16.0	32.4
性別	男子	57.2	13.4	29.4
	女子	46.6	18.4	35.0
学年	5年	54.3	22.2	23.5
	6年	48.8	9.7	41.5
成績	上	54.4	14.7	30.9
	中の上	51.1	15.0	33.9
	中	50.6	16.8	32.6
	中の下	50.9	17.0	32.1
	下	59.6	14.9	25.5
進路	とても難しい高校	54.5	17.6	27.9
	難しい高校	35.2	23.3	41.5
	わりとやさしい高校	49.5	15.0	35.5
	とてもやさしい高校	62.5	17.9	19.6
	高校ならどこでもよい	58.7	9.3	32.0

つもりはないようである。

図10は塾通いの現状を全体像で示した。

こうした結果から、中学生になるとほぼ4人に3人は塾通いの生活を強いられることが

予想される。現在塾に行っていない子どもたちも、塾の効果を否定できず、将来の進路や学業を考える中で学校の勉強だけでは不安を感じているのだろうか。

図10 通塾の分布

(%)

進学塾	補習塾	進学塾+ 補習塾	その他	今後行く予定	行かない
16.7	10.2	13.6	9.4	24.2	25.9
行っている 49.9				以前行っていたが 今はやめた 11.4	行ったことがない 38.7
行っていない 50.1					



## ●塾に行く子と行かない子)))

そこで、塾に通うことの効果について「塾に行くことで学力がつくと思うか」という項目を用いて、現在塾に行っていない子どもたちに塾の効果を尋ねてみた。表16によれば、「と

ても」学力がつくと答えた子は16%、「かなり」を含めると約7割の子どもたちが塾に行ったら学力がつくと感じている。特に成績の中間層の子どもの塾への期待が高い。

表16 塾に行くことで学力がつくと思うか × 属性

		(%)			
		とても つく	かなり つく	あまり つかない	ぜんぜん つかない
全 体		15.6	50.8	25.9	7.7
		66.4			
性 別	男 子	19.0	47.8	23.4	9.8
	女 子	12.5	53.4	28.3	5.8
		65.9			
学 年	5 年	15.8	47.5	26.9	9.8
	6 年	15.4	54.2	24.9	5.5
		63.3			
		69.6			
成 績	上	14.7	42.7	27.9	14.7
	中の上	16.4	50.8	26.2	6.6
	中	14.0	57.3	24.7	4.0
	中の下	15.8	46.7	28.3	9.2
	下	22.0	34.0	24.0	20.0
		57.4			
		67.2			
		71.3			
		62.5			
		56.0			

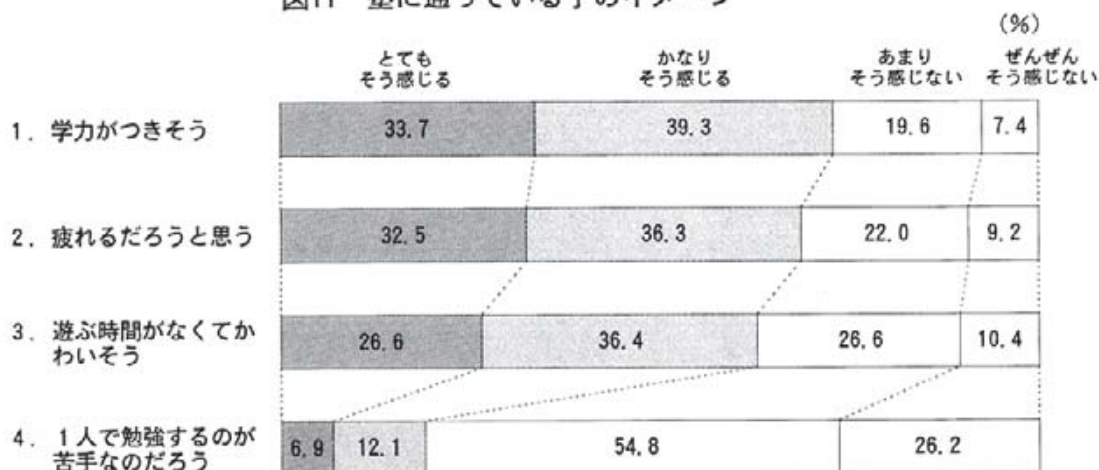
次に、塾に通っていない子からみた塾に行っている子のイメージをみたのが、図11である。「学力がつきそう」「疲れるだろうと思う」「遊ぶ時間がなくてかわいそう」とプラスイメージとマイナスイメージの両面を評価している。成績の上位者では「遊ぶ時間がなくてかわいそう」「疲れるだろうと思う」とマイナスのイメージが強く、下位者では「学力がつきそう」「疲れるだろうと思う」と塾に行くことは疲労感や時間の拘束感が高まりマイナスだが、学力をつけるためにはそうした犠牲もやむを得ないと考えているようである（表17）。受験競争社会の中で、学校の勉

強だけでは学力に不安を感じる子どもや、親の期待が塾への期待と依存とになっているのが現状のようである。

塾通いしている子と今後も塾に行かないとする子の差を学業成績、進路、学校の楽しさでまとめると以下ようになる。

	通塾している子	今後も行かない子
〈成績〉		(%)
上	64.6	54.4
中の上	53.5	51.1
中	48.3	50.6
中の下	41.3	50.9
下	37.2	59.6

図11 塾に通っている子のイメージ



	通塾している子	今後も行かない子
〈進路〉		(%)
とても難しい高校	63.2	54.5
難しい高校	58.1	35.2
わりとやさしい高校	43.1	49.5
とてもやさしい高校	40.8	62.5
高校ならどこでも	46.4	58.7
〈学校の楽しさ〉		
とても楽しい	39.2	29.8
かなり楽しい	44.4	47.7
あまり楽しくない	13.8	19.4
ぜんぜん楽しくない	2.6	3.1

これらの数値からみると、塾通いする子には難関高校を希望している割合が高く、学校の楽しさに差が顕著である。塾通いする子は将来像が明確で、学校生活も充実しているといえるかもしれない。しかし、小学生の段階から塾に通い、難関高校を目指すことが健全な小学生なのだろうか。将来に意欲的ではあるが、時間のゆとりや豊かな友だち関係など人間形成上に犠牲にするものも多いように感じる結果である。

表17 塾に通っている子のイメージ × 属性

	性 別		学 年		成 績					(%)
	男子	女子	5年	6年	上	中の上	中	中の下	下	
	1. 学力がつきそう	33.3	34.0	34.1	33.2	24.2	30.8	34.0	37.2	57.4
2. 疲れるだろうと思う	36.0	> 29.4	32.1	33.0	40.9	33.0	28.3	34.8	40.4	
3. 遊ぶ時間がなくてかわいそう	28.4	> 25.0	30.2	> 23.1	37.9	28.0	23.8	25.9	29.8	
4. 1人で勉強するのが苦手なだろう	10.1	> 4.1	8.4	5.4	12.1	7.7	5.5	5.4	10.6	

「とてもそう感じる」割合  
○は最大値

## 進学塾と補習塾

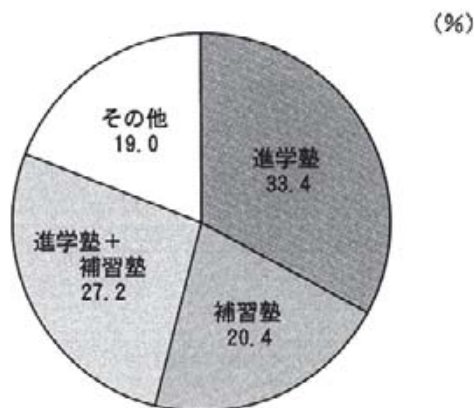


学習塾といっても、中学校の受験を目的とした進学塾や学校の授業を補うための補習塾などその形態は様々である。当然通っている塾のタイプにより子どもたちの塾に対する考え方や、放課後の生活の仕方に違いが出てくることが考えられる。そこで、本章では、塾

のタイプによる違いを明らかにしていくことにする。

塾のタイプについて、図12に示すように、進学塾（中学を受験するための塾）と、補習塾（学校のわからないようなところを教えてくれる塾）、さらに進学と補習を合わせたよ

図12 塾のタイプ（再掲）





うな塾、その他の塾というように4つに分けて子どもたちに尋ねた。本調査では、一番多かったのが進学塾で、全体の約3分の1を占めた。

学年別にみると、6年生の方が進学塾がやや多くみられるが、それほど大きな差はみられず、5年生の段階で、自分の目的をはっきり定めて塾に通っている様子がうかがえる(表18)。

また、その他の塾については、フリーアンサーで記入してもらったが、一番多かったの

が「英語の塾」、続いて「そろばん」「計算の塾」「習字」となっている。

表19により、それぞれの塾にどの程度の学力の子どもたちが行っているのかをみると、進学塾は中学受験を目指しているだけにクラスの中でも成績のよい子が多い。進学と補習を合わせたような塾やその他の塾は、ややよい方に傾いている。補習塾は、ほぼ正規分布を描いており、学習塾に行っていない子の成績とはほぼ同じ結果であった。

表18 塾のタイプ × 学年・性

		(%)			
		進学塾	補習塾	進学塾+ 補習塾	その他
学 年	5 年	30.6	22.5	20.8	26.1
	6 年	35.5	18.8	31.9	13.8
性 別	男 子	31.7	22.1	27.7	18.5
	女 子	35.1	18.6	26.8	19.5

表19 塾のタイプ × 学業成績

		(%)				
		進学塾	補習塾	進学塾+ 補習塾	その他	塾に行って いない子
1. 上		30.0	6.8	11.9	11.3	9.4
2. 中の上		32.4	22.6	26.3	29.3	23.0
3. 中		29.6	45.9	46.3	42.1	44.6
4. 中の下		6.3	18.5	13.4	12.8	15.9
5. 下		1.7	6.2	2.1	4.5	7.1

○は最大値



## ●塾での生活)))

次の表20は、週に何日塾に通っているかをタイプ別に尋ねたものである。進学塾以外は週2日が多く、補習塾とその他の塾では、週2日までで6割から7割に達する。一方、進学塾は週3日と4日で合わせて6割、さらに5日6日と週のほとんどを学習塾で過ごす子どもたちも2割程度いる。

表21と表22は、塾に出かける時間と、塾から帰る時間をそれぞれの塾で比較したものである。表の○印が示すように、出かける時間が早いのが進学塾とその他の塾であるが、大きな差はみられない。しかし、塾から帰る時

間をみると、多くの子どもたちが、7時30分頃には塾を終わり家に帰っているのに対して、進学塾の子どもたちは、8時以降に塾から帰る子どもたちが6割を超す。なんと10時を過ぎてから帰る子どもたちも1割以上もいるのである。

進学塾の子どもたちは、通塾の日数や時間が長く、放課後の生活が心配される結果であった。また、4時に出かけていって9時に帰ってくるとなると、その間5時間。学校で生活するのとほとんど同じ時間を塾で過ごしているのである。

表20 塾のタイプ × 塾に行く日数

	進学塾	補習塾	進学塾+ 補習塾	その他
1. 1日	5.9	8.8	7.1	27.6
2. 2日	11.0	55.2	36.1	44.9
3. 3日	32.8	27.2	38.5	17.9
4. 4日	30.0	6.8	12.2	6.7
5. 5日	16.5	2.0	4.6	2.2
6. 6日	3.8	0.0	1.0	0.0
7. 7日	0.0	0.0	0.5	0.7

○は最大値

表21 塾のタイプ × 塾に行く時間

(%)

	進学塾	補習塾	進学塾+ 補習塾	その他
1. 4時前	3.6	7.1	4.6	9.7
2. 4時～ 4時29分	22.0	13.4	8.9	11.9
3. 4時30分～ 4時59分	35.2	24.2	20.5	25.4
4. 5時～ 5時29分	30.6	29.1	39.1	23.1
5. 5時30分～ 5時59分	4.6	14.9	15.8	18.7
6. 6時以降	4.0	11.3	11.1	11.2

○は最大値

表22 塾のタイプ × 塾から帰る時間

(%)

	進学塾	補習塾	進学塾+ 補習塾	その他
1. 6時前	2.5	14.1	6.4	30.0
2. 6時～ 6時29分	1.3	23.2	11.7	21.5
3. 6時30分～ 6時59分	8.0	26.1	22.2	19.4
4. 7時～ 7時29分	16.8	21.8	38.1	20.9
5. 7時30分～ 7時59分	8.0	4.2	10.6	5.2
6. 8時以降	63.4	10.6	11.0	3.0

○は最大値

## ●塾の評価)))

それでは、どのような意識で塾に通っているのだろうか。まず表23に、塾に行くようになった理由を示した。表の数値は「とても・わりとそう」の割合を示したものであるが、それぞれの塾について数値の高い順に並べてみると――。

「進学塾」は、

- 1位「中学を受験するため」 84%
- 2位「将来役に立つ」 74%

3位「今よりもっと勉強ができるように」 69%

「補習塾」は、

- 1位「今よりもっと勉強ができるように」 76%
- 2位「家の人が行くように言った」 47%
- 3位「学校の勉強がわからなかった」 44%

表23 塾のタイプ × 塾に行くようになった理由

	(%)			
	進学塾	補習塾	進学塾+ 補習塾	その他
1. 今よりもっと勉強ができるようになりたいから	68.8	75.9	73.3	50.0
2. 将来役に立つと思ったから	74.1	42.3	56.2	54.7
3. 家の人が行くように言ったから	37.1	47.3	39.2	48.1
4. 私立(国立)中学を受験するため	83.7	7.6	21.1	2.9
5. 学校の勉強がわからなかったから	4.7	43.8	36.3	15.4
6. 友だちが行っているから	14.7	29.0	28.6	25.8

「とても」+「わりと」その割合  
○は最大値

「進学塾+補習塾」は、  
 1位「今よりもっと勉強ができるように」 73%  
 2位「将来役に立つ」 56%  
 3位「家の人が行くように言った」 39%  
 「その他の塾」が、  
 1位「将来役に立つ」 55%  
 2位「今よりもっと勉強ができるように」 50%  
 3位「家の人が行くように言った」 48%  
 となる。  
 それぞれがはっきりした目的意識のもとに塾に通っていることがうかがえる結果である。

特に進学塾に通う子の意識の高さが目立っている。それは次の表24の学習塾での勉強の仕方にもよく表れており、進学塾での学習は、「わかりやすく」「楽しい」と、とても魅力的なものであるようだ。そして、「宿題がたくさん出る」が5割を、また「予習をしないといけない」が4割を超し、学習塾に行く時間だけでなく、子どもたちの家庭での学習場面にも塾が登場してきている様子がよくわかる。事実、子どもたちから「昨日は塾の宿題をされていて、夜遅くなってしまった」「学校の宿題は忘れた」などというような話もとときどき聞こえてくる。

表24 塾のタイプ × 学習塾での勉強の仕方

	(%)			
	進学塾	補習塾	進学塾+ 補習塾	その他
1. 授業がわかりやすい	88.1	77.4	79.3	66.2
2. 授業を聞くのが楽しい	71.2	49.6	63.3	39.8
3. 宿題がたくさん出る	54.6	38.7	43.0	37.4
4. テストをよく行う	50.7	24.3	31.4	8.6
5. 授業があっという間に終わる	30.8	30.9	28.9	25.3
6. 予習をしないといけない	43.1	13.8	21.9	10.8
7. 先生がずっと話をしている	35.7	20.4	26.3	18.1

「とても」+「かなり」あてはまる割合  
 ○は最大値

それだけに表25に示すように、通塾の効果についても、他の塾以上に進学塾の子どもたちは大きな評価をしている。

一方、表26で、塾通いのマイナス面について尋ねてみると、進学塾の子どもたちは「寝る時間が少なくなった」と「ゆっくり夕食を食べられない」を強く感じている。通塾にはこれらのマイナス以上の効果や期待があるた

め、それほど強くは感じていないようであるが、食べて寝るといふ一番心が休まる時間が小学生の頃から圧迫されている状態については、一抹の不安を感じる結果である。

しかし子どもたちは、表27に示すように生き生きと塾に通っており、進学塾では「とても楽しい」が44%、「かなり」を含めると8割を超している。

表25 塾のタイプ × 通塾の効果

	(%)			
	進学塾	補習塾	進学塾+ 補習塾	その他
1. 勉強の仕方がわかった	89.8	80.5	88.5	56.4
2. 友だちが増えた	78.5	64.6	69.4	61.8
3. 勉強のやる気がでた	78.6	60.6	67.5	44.0
4. 学校の成績が上がった	75.6	63.2	72.2	38.0

「とても」+「かなり」あった割合  
○は最大値



表26 塾のタイプ × 塾通いのマイナス面

(%)

	進学塾	補習塾	進学塾+ 補習塾	その他
1. ゆっくり友だちと遊べない	56.8	57.6	51.3	51.5
2. 寝る時間が少なくなった	57.0	15.0	26.4	12.7
3. ゆっくり夕食を食べられない	30.5	23.3	15.7	18.6
4. ゆっくり家族と話せない	24.7	20.0	14.2	8.2

「とても」+「かなり」そう思う割合  
○は最大値

表27 塾のタイプ × 塾の楽しさ

(%)

	進学塾	補習塾	進学塾+ 補習塾	その他
1. とても楽しい	44.2	32.6	38.1	29.5
2. かなり楽しい	38.3	34.8	43.7	39.5
3. あまり楽しくない	14.2	23.6	15.7	20.9
4. ぜんぜん楽しくない	3.3	9.0	2.5	10.1

○は最大値



これまでみてきたように、塾通いする子どもたちは、楽しく意欲的である。学校では授業中退屈な顔をし、もうこれ以上勉強するのは嫌だと言っているような子どもたちが、学校を終わってから学習塾に通っていくのである。

まず、どんな気持ちで塾に行っているのか、学校の楽しさと塾の楽しさをみたものが表28と表29である。

表28は塾に行っている子と、行っていない子の学校の楽しさを比較してあるが、「とても楽しい」に注目してみると、塾に行ってい

る子の方が10%ほど高くなっている。また、表29より通塾者は学習塾もほとんど同様に楽しいと答えており、学校にも、塾にも楽しく通っているのである。

それでは、子どもたちの塾への楽しさはどこからきているのだろうか。ここからは、学校と塾との比較を中心にデータをみていくことにする。

なお、塾と学校を比較する場合、両方の授業を経験していないと答えることができないので、ここからの数値はしばらく学習塾に通っている子のデータを中心に使っていく。

表28 学校の楽しさ

		(%)			
		とても楽しい	かなり楽しい	あまり楽しくない	ぜんぜん楽しくない
全 体		34.8	45.8	16.5	2.9
非通塾者		29.4	49.8	17.6	3.2
通塾者		39.2	44.4	13.8	2.6

非通塾者の数値は塾に「行ったことがない」者のみの割合

表29 学校の楽しさと塾の楽しさ（通塾者）

		(%)			
		とても楽しい	かなり楽しい	あまり楽しくない	ぜんぜん楽しくない
通塾者	学 校	39.2	44.4	13.8	2.6
	学習塾	36.6	39.9	17.9	5.6

## ●学習場面の比較)))

算数の授業場面で学校と塾を比較したのが表30である。そして、「とてもあてはまる」に着目して、学校と塾との違いを図化したのが図13である。一見してわかるように、すべ

ての項目で塾の方が「とてもあてはまる」数値が高くなっている。特に差の大きいものは「授業がわかりやすい」「宿題がたくさん出る」、そして「授業を聞くのが楽しい」で、

表30 算数の授業（学校と塾の比較）

		(%)				
		とてもあてはまる	差	かなりあてはまる	あまりあてはまらない	まったくあてはまらない
1. 授業がわかりやすい	学校	28.8		45.3	20.5	5.4
	塾	44.3	15.5	35.1	13.8	6.8
2. 授業を聞くのが楽しい	学校	22.7		29.9	34.5	12.9
	塾	33.2	10.5	26.8	26.4	13.6
3. 宿題がたくさん出る	学校	8.8		18.9	52.3	20.0
	塾	22.7	13.9	21.9	30.3	25.1
4. テストをよく行う	学校	7.8		26.6	57.7	7.9
	塾	15.8	8.0	17.3	35.7	31.2
5. 授業があっという間に終わる	学校	7.6		18.2	49.1	25.1
	塾	13.8	6.2	16.2	38.3	31.7
6. 予習をしないといけない	学校	4.4		11.9	37.7	46.0
	塾	10.7	6.3	15.6	35.7	38.0
7. 先生がずっと話をしている	学校	5.4		25.2	61.2	8.2
	塾	6.5	1.1	20.7	46.3	26.5

10%を超える差となっている。

次の図14は、進学塾に行っている子はその塾で、補習塾に行っている子も同様にその塾で、また塾に行っていない子は学校での算数の授業を、それぞれがどのような気持ちで勉強しているかをみたものである。「とてもあてはまる」割合をみていくと、すべての項目で進学塾が高くなっており、すべての項目で学校が低くなっている。進学塾に通っている

子が、塾の授業に対して「わかりやすく」「楽しい」と半数の子どもたちが高い評価をしているのに対して、学校の授業は「わかりやすい」が2割、「楽しい」という子はやっと1割である。塾には、お金を払って目的を持って自主的に通う。学校とは根本的に違うのだといっても、それによりこの大きな開きを説明しきることはできない。

図13 学校と塾との算数の授業

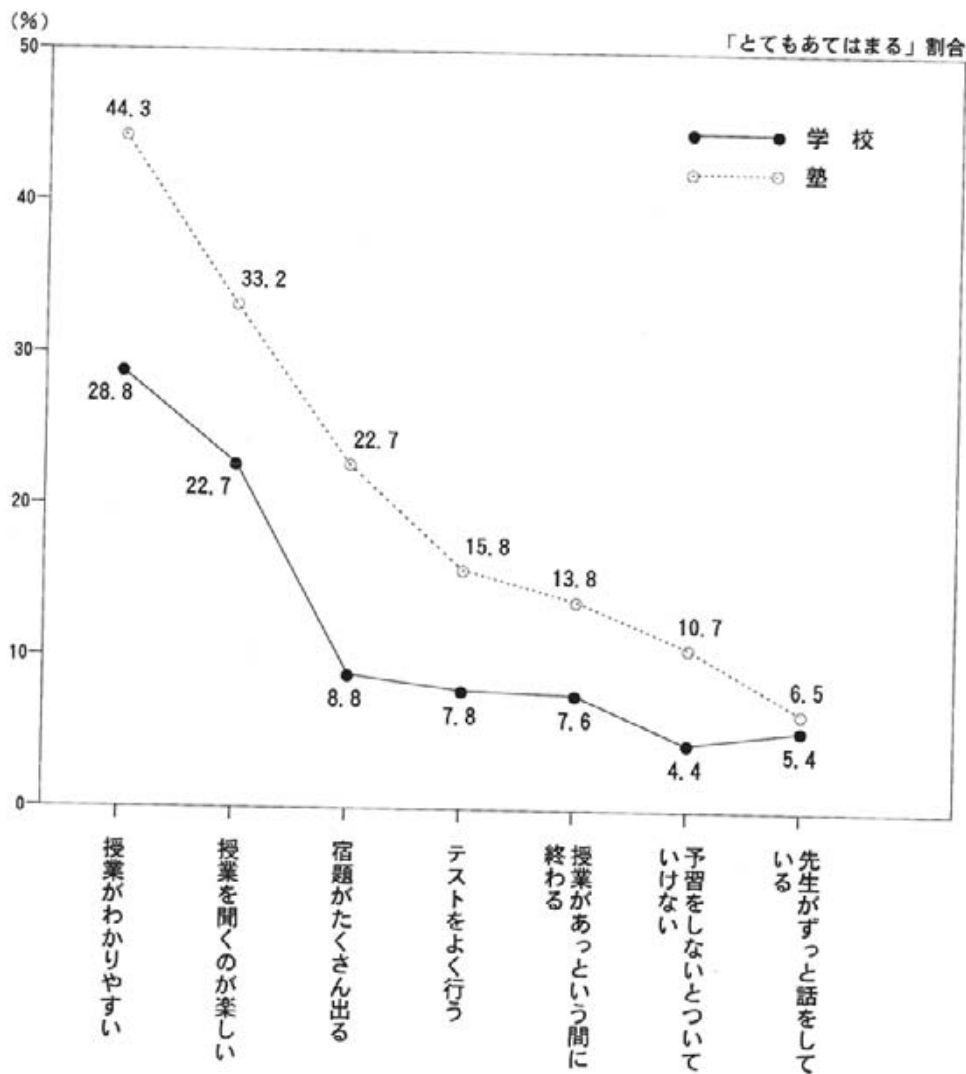
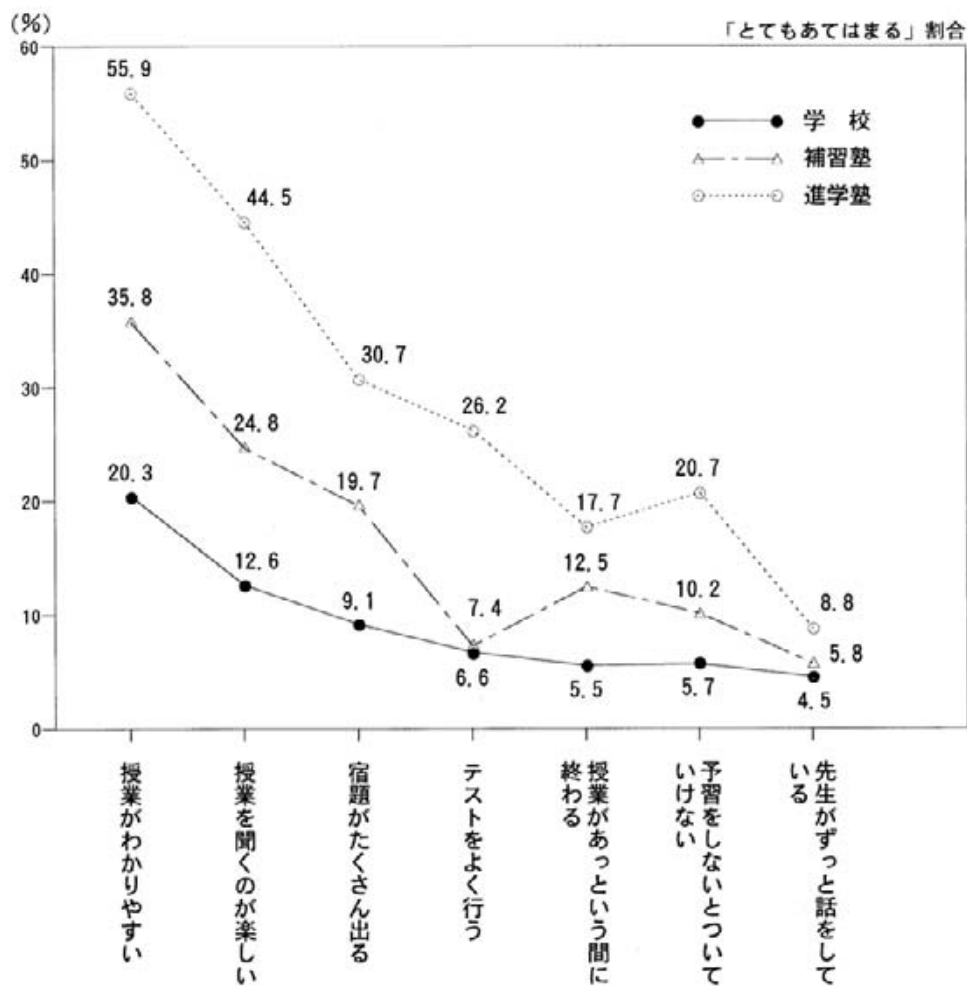




図14 学校と進学塾・補習塾との算数の授業



## ●先生に対する評価)))

次の表31は、先生に対する評価をみたものである。またそれを図化したのが、図15である。「とてもあてはまる」割合で比較してみ

ると、10%を超して大きな差を示したのが、「幅の広い知識を持つ」「教え方がうまい」で、次いで「先生として尊敬できる」が9%であ

表31 担任の先生と塾の先生（学校と塾の比較）

		(%)				
		とてもあてはまる	差	かなりあてはまる	あまりあてはまらない	まったくあてはまらない
1. ユーモアがある	学校	35.9		33.5	24.3	6.3
	塾	39.7	3.8	27.1	22.1	11.1
2. 教え方がうまい	学校	33.9		43.8	18.3	4.0
	塾	50.7	16.8	33.1	12.4	3.8
3. 子どもに人気がある	学校	29.1		36.6	25.1	9.2
	塾	30.8	1.7	27.6	27.7	13.9
4. 先生として尊敬できる	学校	28.6		38.9	25.6	6.9
	塾	37.2	8.6	31.3	23.0	8.5
5. 子どもたちと遊んでくれる	学校	22.0	5.3	22.9	32.6	22.5
	塾	16.7		13.9	27.1	42.3
6. 幅の広い知識を持つ	学校	23.3		46.6	26.2	3.9
	塾	43.7	20.4	34.3	16.7	5.3
7. 悩みを相談したい	学校	12.6	0.8	20.5	43.3	23.6
	塾	11.8		12.2	33.9	42.1

る。

これを、進学塾の子どもたちによる塾教師への評価、補習塾の子どもたちによる塾教師への評価、塾に行っていない子による学校教師への評価と比較してみたものが図16である。進学塾の教師への高い評価が目立つ結果である。

ここで、それぞれの評価を高い順に並びか

えてみると――。

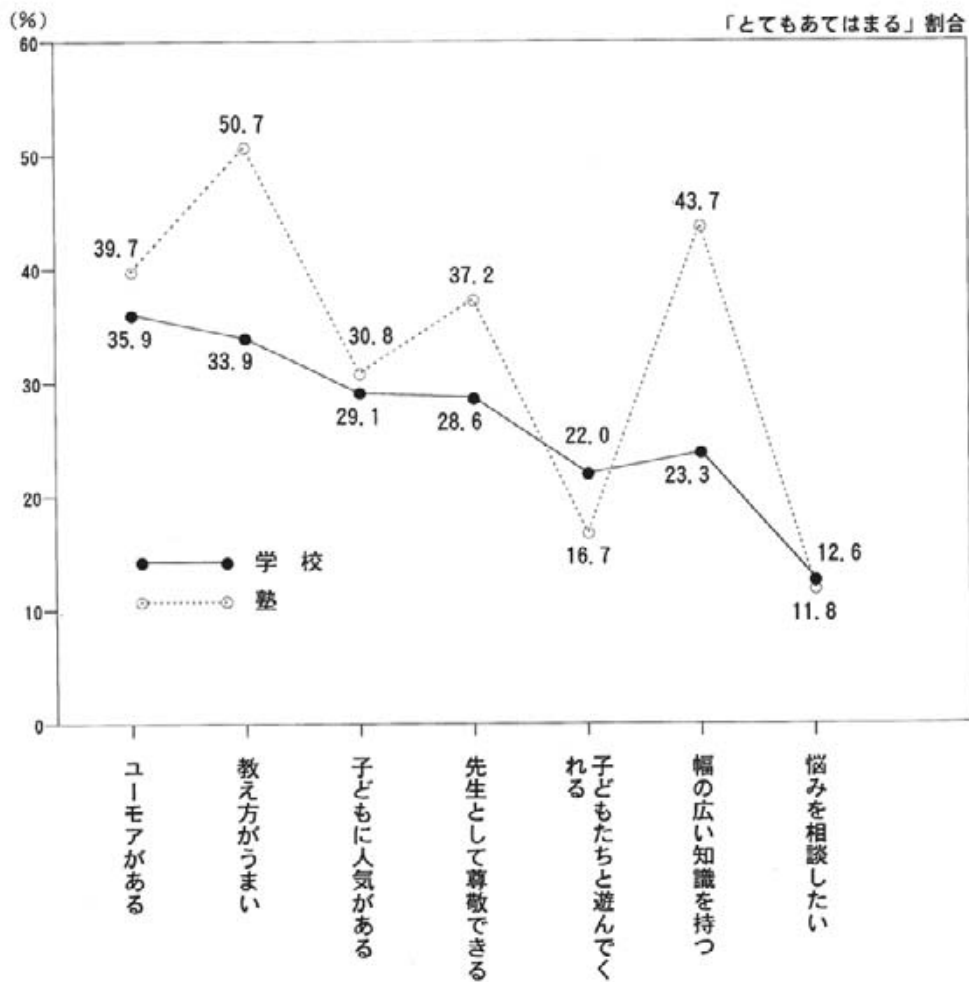
「進学塾」は、

- 1位「教え方がうまい」 59%
- 1位「幅の広い知識を持つ」 59%
- 3位「ユーモアがある」 48%

「補習塾」は、

- 1位「教え方がうまい」 42%

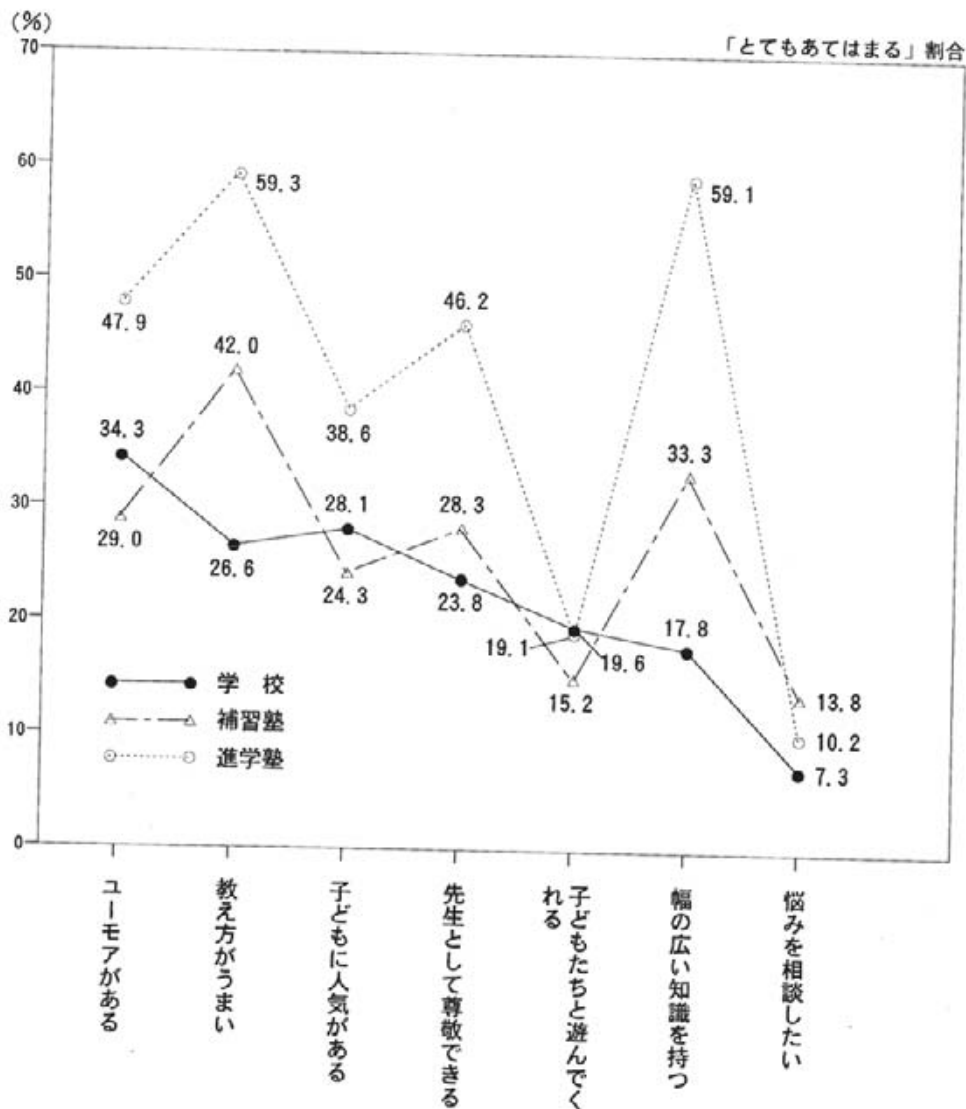
図15 担任の先生と塾の先生



2位「幅の広い知識を持つ」 33%  
 3位「ユーモアがある」 29%  
 「学校」は、  
 1位「ユーモアがある」 34%  
 2位「子どもに人気がある」 28%  
 3位「教え方がうまい」 27%  
 となる。

補習塾、進学塾がともに「教え方がうまく」「幅の広い知識を持つ」と、その役割の中でしっかり評価されているのに対して、学校の先生は数値も低く、また「ユーモア」「人気」が本来の教えるという役割に対して、高い数値にあることがやや気にかかる結果である。

図16 担任の先生と塾の先生（進学塾と補習塾）



## ●学校と塾の違い))

これまでは、学習塾と学校の違いを別々の項目で尋ね、それを合成する方法で考察を進めてきた。そこで、学校と塾とを対の形にして尋ねたのが表32である。

学校と塾のどちらがそうかと選択させるとさすがに、学校に軍配を上げる項目が多い。「友だちと話す楽しさ」を中心に、「授業の楽しさ」「通う楽しさ」など、楽しさは学校への評価が7割を超している。しかし、「先生の熱心さ」「先生の教え方のうまさ」になると、学校に向かう数値はやや下がってきて、「授業のわかりやすさ」では塾への評価が4割というように数値は拮抗してくる。

これを「塾に行っていない子」「進学塾に行っている子」「補習塾に行っている子」の

3タイプで比較したものが図17である。学校への評価が一番高いのが「塾に行っていない子」であり、すべての項目で学校の方がよいという割合が7割を超えている。しかしこれは、学習塾を体験していないための数値であり、授業の楽しさや、教え方のうまさ、わかりやすさなどに対して満足していないことはこれまでみてきた数値が物語っている。

そして、進学塾や補習塾など通って塾を体験している子になると、数値はかなり塾の方に傾いてくる。特に進学塾では「先生の教え方のうまさ」「先生の熱心さ」「授業のわかりやすさ」で、塾の方に軍配を上げる子が学校を上回ってくる。

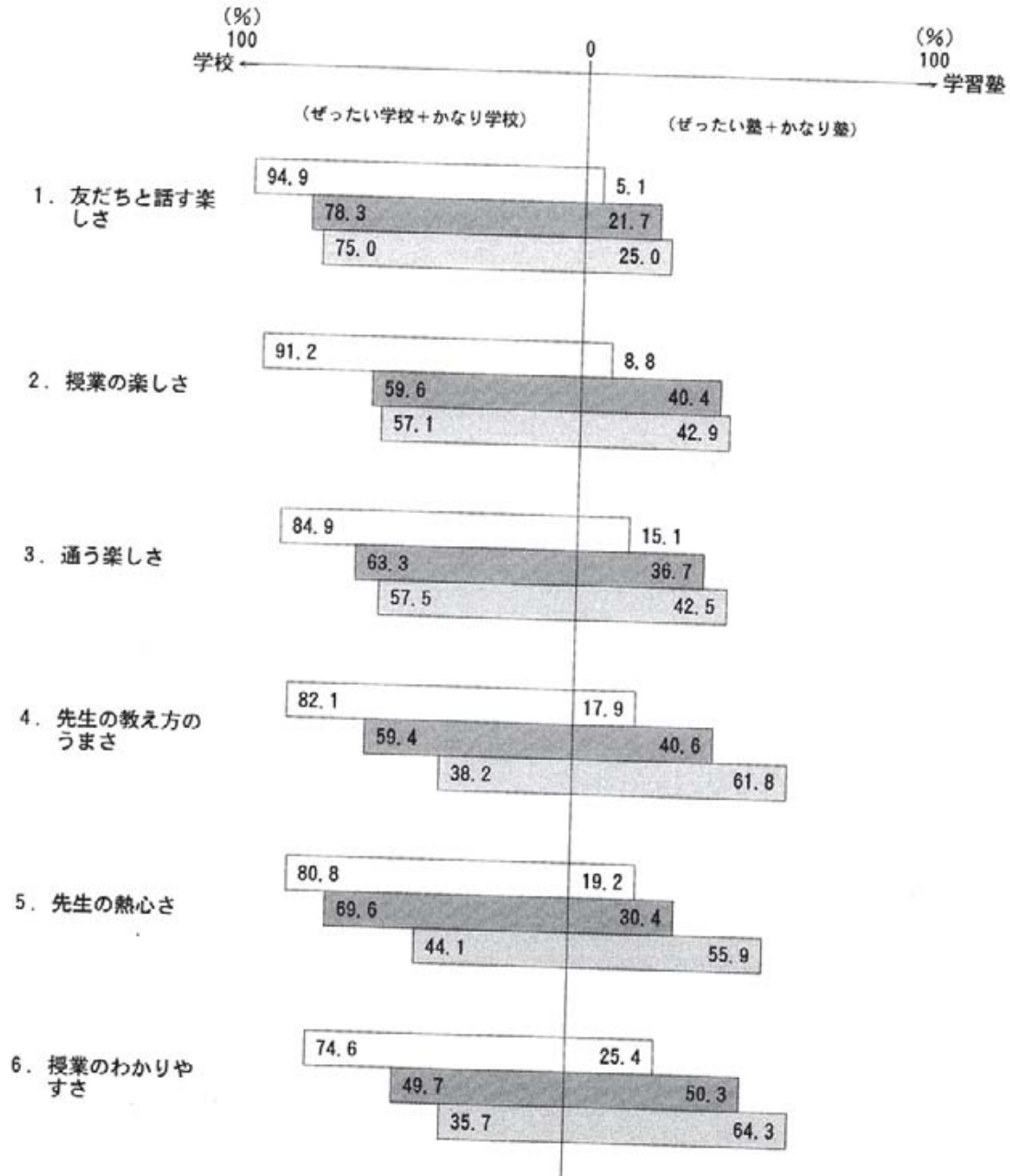
表32 学校と塾のどちらが

(%)

	学校			塾		
	ぜったい	かなり	計	かなり	ぜったい	計
1. 友だちと話す楽しさ	57.7	28.7	86.4	7.5	6.1	13.6
2. 授業の楽しさ	36.5	37.3	73.8	15.1	11.1	26.2
3. 通う楽しさ	32.7	39.1	71.8	17.2	11.0	28.2
4. 先生の教え方のうまさ	25.3	41.2	66.5	23.1	10.4	33.5
5. 先生の熱心さ	23.6	46.7	70.3	20.9	8.8	29.7
6. 授業のわかりやすさ	22.2	38.5	60.7	27.2	12.1	39.3



図17 学校と塾のどちらが × 非通塾者・補習塾・進学塾



塾に行っていない  
 補習塾に行っている  
 進学塾に行っている

## ●まとめに代えて)))

学習塾の調査は、10年あまり前、Vol. 4-8で行って以来、今回で2回目となる。また、本調査実施の前に『モノグラフ・中学生の世界』では、Vol. 49に「学習塾通いする中学生」が刊行された。

そしてその中では、中学校で子どもたちの学校離れが進み、学習塾の努力が目立つ一方で、学校の空洞化が進行しているとまとめられていた。

そのような状況が小学校ではどうなっているかということを検証していくことも、今回の調査では大きな関心であった。

調査当初、小学校は学級担任制であり、教師との密着度が強く、塾の教師に比べて担任への期待は高いのではないかと予想していた。また、10年前の調査からも、「先生の教え方のうまさ」「勉強のおもしろさ」など、多くの項目で学校の方が塾よりも圧倒的に高い評価を受けていたのである。(『モノグラフ・小学生ナウ』Vol. 4-8参照)

中学生への調査で、冒頭「今回の調査は予想外の結果であった」と記されていたが、小学生も同様に、子どもたちの小学校離れが確実に進行していた。特に進学塾に通っている子どもたちの大部分が、学校には魅力を感じ

ていない姿が表されていた。また、補習塾に通っている子どもたちの中で、塾に通うことでかろうじて基礎学力を身につけている子がいることも確かである。それと同時に、学習塾に行っていない子どもたちも、学習塾に行っている子どもたちより、学校の授業や担任への評価は、より低い数値を示しているのである。

学校は、より新しいものを求める知的欲求の高い子どもたちを満足させることができず、かといって、わからなくて困っている子どもたちに手をさしのべてあげることができない。そして、何の特色も持たないままに、子どもたちの学校離れを推し進めているような感じさえしてくる。

新しい学力観のもと、学校では子どもたち一人一人の考えや子どもたちの学ぶ意欲を大切にした教育への取り組みが行われてきている。教師の授業に向ける情熱が子どもたち一人一人にしっかり伝えられ、子どもたちにとって充足感の持てる学習の場として機能するよう、学校の努力が大切であることが、この学習塾の調査によって浮き彫りにされてきたといえよう。